長谷川四郎全集　第九巻

長谷川四郎全集第九巻

一九七七年五月二〇日発行

著者長谷川四郎
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一(代表)・一八四一(編集)
振替東京六-六二七九九
中央精版印刷・美行製本
ブックデザイン平野甲賀

©一九七七年〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集　第九巻

晶文社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1 模範兵隊小説集
分遣隊 11
駐屯軍演芸大会 39
加古一等兵の面影 62
炊事兵 93
2 兵隊芝居 121
3 奇想天外神聖喜歌劇（ミステリヤ・ブフ） 173
4 アルブレヒト・ゲース『不安の夜』 239
ポスイムシ『パサジェルカ〈女船客〉』他 240
月末の感想 242
知恵の鏡 244

ドストエフスキーの深い沼　245
安部さんの芝居　247
集団的製作の方向　249
『アンナ・カレーニナ』の再演によせて　251
〝物〟を書くこと　252
次回公演へキックアウト　254
『ミステリヤ・ブッフ』作者の言葉　256
アジア・アフリカ作家会議日本代表団の演説
ゴーリキー通りの散歩　262
歌謡曲　267
二つの戦争画展　269
エレンブルグ追想　273
第七回新日本文学賞小説部門選評　277
安部公房『燃えつきた地図』　278

作者のノート・9　283
解題　福島紀幸　289

1

模範兵隊小説集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

分遣隊

分遣隊は平野の中の土饅頭だった。土饅頭には平野と同じように草がぼうぼう生えていて、それが人工の土饅頭であるとは、外部から見てわからなかった。またこの土饅頭が分遣隊であって、内部に兵隊がいることを示すものは、練兵場とそこで軍事訓練をやっている三名の兵隊だけだったが、練兵場は平野と大して変りがなかったし、兵隊は兎のように保護色の服をきていた。

四方八方から敵にかこまれている。敵に発見されるといけないから、無用の者は土饅頭から出るな。これが数代にわたる分遣隊の申し送り事項だった。けれども月日がたつにつれて、兵隊たちは用もないのに外へ出た。しかし外へ出て三十メートルもぶらぶら歩くと、まるで主人の口笛をきいた犬のように、また土饅頭へ走って帰っていった。

一日二十四時間。理想的な分遣隊は時計のように動くことになっていた。北極圏に一年、赤道直下に一年、ためしにおかれても、一秒も狂わないウォルサムの時計のように。そしてこの時間の外へ出ていくことは、とりもなおさず、時間の外へ出ていくことであって、時間の外へ出ていくことは、すなわち死ぬことを意味した。

なによりも分遣隊が時計に似ている点は、土饅頭を中心にぐるっと大きく円周をなして、深さ一・六〇メートルの——これはだいたい分遣隊員の平均身長だったが——細長いザンゴウが掘られていることだった。

誰か一人、見張っているものがいなくてはならなかった。このザンゴウの中にかくれて、円周をぐるぐる歩きまわる——これが歩哨の任務だった。時計の針と同じ方向へまわるのが普通だったが、これは不文律であって、必ずしもそうでなくてもよかった。逆にまわってもよかった。一時間で一周するのが普通だったが、これまた必ずしもそうでなかった。「人間は器械ではない」と分遣隊長は云った。五分くらいの狂いは大目にみられた。要は周囲の警戒にあった。

背丈の低い兵隊のために、ザンゴウの中のところどころに踏台がおかれていて、そういう兵隊は踏台に立ち、また、背の高い兵

隊はちぢめた首をのばし、ザンゴウから頭を出して、しょっちゅう、不安なアザラシのように水面を見わたさなくてはならなかった。このようにまでしても、なかなか、敵の姿はみとめられなかった。

歩哨の任務は、すなわち分遣隊の任務であって、深夜の一瞬といえども、休止することがなかった。従って、早朝の荘厳礼拝にも歩哨一名は列席を免除されていた。

現行（といっても、今は廃止になっているから、つまりは当時の、ということだが）分遣隊服務規程によると、動哨中の歩哨は単独にて早朝の荘厳礼拝を挙行すべし、ということになっていた。そして付則ともいうべき反省事項には「君子は独りをつつしむ」と書いてあった。

荘厳礼拝の時には全員が土饅頭から外へ出たから、敵に発見される危険がもっとも大きかったが、この祭式の重大さを思えば、わが身の危険など問題でなかった。それに、もしこの荘厳礼拝を怠るならば、敵の襲撃など物の数でない恐るべき天罰が、分遣隊の上に下されたことだろう。

早朝。分遣隊副官（軍曹）の吹きならす式典ラッパがゆっくりと鳴りひびいた。荘厳礼拝。幾日も幾月も雲一つなく熱い日がつづいていたが、その日は地平線からのぼってくる太陽が異様に赤く、ゆらゆらと燃えあがって、今までよりもぐんと熱い、おそらくは最高に熱い一日を告知していた。ぐるりはさえぎるものなき、ただひろびろとした野原だった。土饅頭を中心にザンゴウが円周をえがき、さらにこのザンゴウの外側を、ぐるっと地平線が円周をえがいていた。天に日輪、地に土饅頭だった。そしてこの地方には、誰云うとなく次のような極り文句があった。

隣り村まで六百里
だがその村も
あるかないかわからない

兵隊たちが土饅頭から這い出して、練兵場に一列横隊にならび、ちょうど地平線から這い出してくる太陽にむかって捧げ銃の礼をする——これが、荘厳礼拝だった。分遣隊副官の吹きならす式典ラッパがゆっくりと鳴りひびいて、それは太陽がただの太陽でない神秘の世界を、兵隊たちに吹きこんでいた。

おがめやおがめ
大きくなる石
生長する石
あらたかな石
世に二つなき石

ぽつんと一人だけ、兵隊たちから三十歩前進した位置にあって、分遣隊長（少尉）は孤独な後姿を兵隊たちに見せ、すらりと抜刀、

のぼってくる太陽に、うやうやしく最敬礼をした。荘厳礼拝。これはいかなる分遣隊も、中隊本部・大隊本部・連隊本部・大本営と同時におこなうべき儀式だった。しかし分遣隊にはせいぜい中隊本部の所在がわかっているだけであって、それ以上の上級本部となると、もうどこにあるものやらわからなかった。

ゆっくりと分遣隊副官の吹きならす式典ラッパが終りに近づきつつあった。兵隊たちは直立不動で捧げ銃をしていた。その時、分遣隊長は急に最敬礼をやめて、兵隊たちの方へ向きなおった。すると、分遣隊長その人が兵隊たちから荘厳礼拝をうけているように見えたが、これはけっして僭上の行為ではなかった。最末端とはいえ、分遣隊長も、雲の上からそれだけの権威が授けられていた。

ゆらゆらと赤い太陽が地平線をはなれた。

「やめい。」

すらりと刀をサヤにおさめて、分遣隊長が云った。何千回となく発せられた声であって、口をひらいただけで、もうそれとわかった。式典ラッパは長く尾をひいて、ぴたりとやんだ。兵隊たちは捧げ銃をとき、立て銃の姿勢になった。

「やすめ。やすんだままきけ。」分遣隊長はつづけたが、これまた何千回となくくりかえされ、もうそのあたりの空気がそれを暗誦しているのではないかと思われた。空気がかすかにふるえて、兵隊たちの鼓膜につぎのような隊長訓示がひびいてきた。

——おはよう。みんなげんきか。ごくろう。ともどもに、ともどもに、神に感謝をささげよう。小官無上の喜びである。ありがたい。ありがたい。

——ところが、諸君。諸君はわが分遣隊の服務規程を暗誦しておるな。おるか。おらないか。手をあげい。よろしい。おるな。しかし諸君よ。諸君の暗誦しておる服務規程は、気をつけ、大いなる御慈悲によって、諸君がどうやら読み、かつ守ることができるように、とくにやさしくなされたる、仮の服務規程である、のだ。このことをユメ忘れるでないぞ。やすめ。

——この服務規程の原本は、よろしいか、守ることはおろか、読むこともでけん。ひじょうに厳格なものであって、現在の諸君には、タカネのハナじゃ。とうてい実行不可能である、のだ。悲しいかな、凡夫の悲しさ、訓練がまだまだ足りん。

——もしこの服務規程原本が実施されんか、いやはや、諸君は身体が五つあっても、まだ足りんじゃろう。わかったな。

——しかるがゆえにだ。いまだいたらざる諸君の身をおもんばかって、かくのごとく、とくべつゆるやかになされたる、大いなる御慈悲に感謝したてまつり、おのおの、本日もその本分をまっとうされたい。

——おい、副官、解散させい。

あらまし右のようなものだった。

その朝、第十六分遣隊においても、荘厳礼拝は毎朝の御燈明のごとくあげられた。第十六といったが、一つこっきりの分遣隊というものはなくて、それは中隊本部中隊長室の板壁にかかげられ

ている分遣隊分布図を見ればわかる通り、一目瞭然、二十個所、扇形に散開、同一平面上に点在していたからである。こころみに、分布図の一隅につけられた縮尺ではかってみると、分遣隊と分遣隊との距離はそれぞれ六十キロもあったし、各分遣隊と中隊本部の距離は平均して二百五十キロもあった。

「わかれ。」副官が号令をかけた。

待ちに待たれた号令だった。兵隊たちはわれさきにと一目散、土饅頭のアナグラめがけて殺到した。分遣隊長は満足の眼差しでそれを見た。一つ二つ三つ。食器を食卓にならべる音。あてがわれた食事が兵隊たちをかくのごとく疾走させた。

仮の、というのはつまり、現行の服務規程によると、隊長一名、副官一名、兵隊八名、計十名が分遣隊の内容だった。土饅頭にぎっしりのアンである。隊長・副官はしばらくおくとして、兵隊八名のうち一名は炊事当番。これは半常勤の半職人であって、ほとんど交替することなく、「軍隊調理法」にもとづき、兵隊食と隊長・副官食を調理していた。厳密には隊長食と副官食は元来、別物であったが、分遣隊は敵前であるので、戦時建制をとり、臨時に一つにされていたのである。

残り七名の兵隊は一日二十四時間。この二十四時間を一時間ずつに分割し、たえず交替し、生存していた。すなわち、一時間は動哨（動く歩哨）。一時間は睡眠。一時間は掃除・洗濯・整頓。一時間は兵器の分解・手入れ。一時間は軍事訓練。これを順ぐりにくりかえした。従って、もし時間を無限大とすれば、どの一時間も無限にあったが、もしこれを一日二十四時間に限定すれば、のこる睡眠時間は一昼夜通算五時間弱だった。

分遣隊長の訓示は、訓示というより暗示に近かった。もしも分遣隊長の云ったように、服務規程の原本というものがあって、それが或る日、施行されたとするならば、この睡眠時間が一昼夜にゼロとなるか、ひょっとすると、マイナスになるのではあるまいか、と思われたからである。「こら、眠れ、眠らんか」と分遣隊長は睡眠時間の兵隊に向って云った。子守唄だった。

兵隊よ、眠れ
眠れ、眠りは
神の慈悲なれば

「動哨交替。上番。」

メシつぶを一つ、口からとびださせ、武装した寝惚顔の兵隊が、分遣隊長にむかって直立不動、捧げ銃をして、こう云った。一時間かつかつ眠ったかと思うと、その眠りからひっぱり出されて、早朝の荘厳礼拝に馳参じ、つづいてあてがわれた朝食を五分間でなめつくして、今やこの兵隊は動哨勤務に上番——ザンゴウ円周のぐるぐるまわりにでかけようとしていた。

「おう。ごくろう。しっかりやってこいよ。敵影見えたら、すぐ知らせ。ぬかるでないぞ。」

無限の遠方でかたかたと電信のキーをたたくと、それが伝わってくるかのように、分遣隊長はこう云った。これまた毎度、くりかえされる、ほとんど永遠のセリフだった。

土饅頭の出入口は最小限に小さなものだった。ごそごそと不器用に、巨大な旧式歩兵銃をかかえこみ、兵隊はその小さな出入口から出ていった。分遣隊の時計は休みなく動いていた。隊長と副官はさしむかいで、隊長・副官食をたべていた。その時、ごそごそと不器用に、巨大な旧式歩兵銃をかかえこみ、兵隊が小さな出入口から入ってきた。上番兵と交替に動哨勤務から下番してきた兵隊である。直立不動。捧げ銃。

「動哨中異状なし。ただ今より睡眠。」

ところが、その日は少し変っていた。というのは、そんな声がどこからも聞えてこなかったからである。分遣隊長は顔をあげて見た。たしかに眼前に兵隊が一人、不動の姿勢で立っていたが、どう見てもそれは、今しがた出ていった兵隊とそっくりだった。奇妙といえば奇妙であったが、考えてみれば、けっしておどろくにあたらなかった。要するに、ぼさっとした、あたりまえの兵隊だった。

「まだ交替せんとったのか。」

もぐもぐ口を動かし隊長が云った。まず食べることのほうが先にたっていた。

「交替が、できません。」

兵隊が云った。というより、口をひらくと、そう聞えた。

「ぼさぼさするなよ。」

副官が云った。

「交替できません。」

こんどははっきりと聞えた。

「なんだと。ねぼけるなよ。早くいって、交替せい。」

副官は調教師だった。腰かけたまま、長いムチを遠くから、巧みにぴしりと、兵隊の頭上に鳴らした。警告である。もし目をさまさなければ、次は頬を打つだろう。兵隊はよく馴れた象のように、まばたき一つしなかった。

「6D一年兵が見あたりません。」

「もう一度、云ってみろ。」

「はい。6D一年兵が見あたらないのであります。」

不文律ではあったが、分遣隊の兵隊は銃の番号と入隊年次で呼ばれることになっていた。彼らの姓名は、まるで魂をあずかるといったぐあいに、分遣隊長が一括して袋にいれ、保管していた。これまた戦時の建制のしからしむるところであった。そして銃と同じ番号が上衣、帽子、ズボン、靴、毛布、外套、帯剣、食器……とにかく、なんにでもくっついていた。

見ないでもわかったことであるが、壁に貼りだされている番付「動哨勤務上番下番表」によると、6D一年兵とは、現在上番中の兵隊のことであって、従って眼前に立っているこの兵隊と交替して下番し、ひとり睡眠に入るべき兵隊だった。その兵隊が見あたらないとなると、交替もまたできないわけだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com